

## 論文要旨

### ニューカマーの子どもの困難対処とその資源 —ソーシャルサポートとハーディネスを中心に—

岡村佳代

日本社会のグローバル化とともに、ニューカマーと呼ばれる人々が増加し、日本の学校においてもニューカマーの子どもが増加している。ニューカマーの子どもの教育に関する研究は蓄積されつつあるが、ニューカマーの子どもを日本で成長していく能動的な存在として捉え、彼らの持つ力を育むような視点の研究は少ない。そこで、本研究では、ニューカマーの子どもの困難の現状を把握し、その困難に対する対処行動、ソーシャルサポート、ハーディネスに関する実証研究を行い、彼らの生きる力について検討することを目的とした。

本研究は、全 10 章で構成される。第 1 章から第 4 章までは文献研究を行い、第 5 章から第 9 章では実証研究、第 10 章において総合的考察を行った。

第 1 章においては、日本のグローバル化の現状として、外国人登録者数、在留外国人数の推移を概観した。また、日本の学校におけるニューカマーの子どもの現状として、就学制度、教育支援、義務教育課程修了後の高校への進学に関する問題点を述べた。

第 2 章では、ニューカマーの子どもを取り巻く環境として、家族の特徴、日本の学校の特徴、地域社会の特徴を概観し、多様化しているニューカマー家族、排除と受容、相反する特徴を持つ日本の学校文化、地域社会の外国人、ニューカマーの子ども受け入れ状況などを示した。

第 3 章では、日本におけるニューカマーの子どもに関する研究動向を、「適応」、「言語と学業」、「進学と進路」、「アイデンティティ」という側面から整理し概観した。どの側面においても、日本社会、学校の中で苦慮する子どもの様子が窺えた。

第4章では、本研究に関連する諸理論を取り上げた。困難に対する「対処(コーピング)」「ソーシャルサポート」、「ハーディネス」について概観した結果、これらは、相互に関連する可能性があることを示した。さらに「人と環境の適合」という観点を示し、研究課題を述べた。

これらを踏まえ、第5章では、ニューカマーの子どもの困難と対処行動について質的分析を行った結果、困難は『友人関係困難』、『日本語能力不足』、『教育的支援不足』、『教師との関係困難』の4つの大カテゴリー、対処行動は、『状況焦点的問題解決』、『自己焦点的問題解決』、『回避』、『サポート希求』の4つの大カテゴリーと＜感情的自己表現＞という中カテゴリーに分類された。ニューカマーの子どもの困難には、文化的差異や言葉の問題に付随する対人関係の困難が多いことが示された。

第6章では、ニューカマーの子どもの困難と対処行動を量的調査により示した。困難については『基本的サポート不足による混乱』、『日本人からの疎外』、『学校・教師不信』、『同化要請』、『日本人の異文化理解不足』、『部活動文化への困惑』の6因子、対処行動については『問題解決』、『感情的自己主張』、『気晴らし』、『回避』、『サポート希求』の5因子が抽出された。中学生と高校生の比較では、困難には質的な差異がみられたが、対処行動には差異がみられなかった。

第7章では、ニューカマーの子どもの学校生活における困難と対処行動の関連を検討した。その結果、『問題解決』には、周囲の異文化への理解が影響する可能性が示され、また、『回避』の対処行動を軽減し、『サポート希求』の対処を促すうえで、日本人の友人との関係が重要であることが示された。

第8章では、ニューカマーの子どもが実際にアクセスし、活用しているソーシャルサポートの構造と機能を明らかにした。ニューカマーの子どもは家族、学校、地域コミュニティ内に多様な困難対処におけるリソースを獲得しており、各々が道具的サポート、情緒的サポートの両面の機能を果たしていたことが示された。各対象者の検討からは全体的にソーシャルサポートが不足しているケースがある一方で、地域コミュニティの様々なリソ

スや機能を活用しているケースがみられ、地域コミュニティの持つ力が示された。

第9章では、日本で成長したニューカマー青年の持つハーディネスについて検討した結果、『ルーツ受容』、『過去受容』、『現状肯定』、『未来開拓志向』の4つの要素があることが示された。ハーディネスの獲得に関して『ルーツ受容』の有無が重要であり、『現状肯定』にはハーディネス獲得の起点となる可能性があることが示唆された。

第10章では、これらの結果を総合的に考察し、学校環境における教師や日本人の友人の重要性、地域コミュニティにおける様々な可能性を述べた。また、ニューカマーの子どものハーディネスを育むために、自ら環境を調整していく力や支援しすぎない支援の重要性を述べた。地域コミュニティにおけるインフォーマルなソーシャルサポートの実態やニューカマーのハーディネスという彼らの持つ強さに焦点をあて、それらを示したことは、本研究の意義であると言える。本研究で得られた結果に基づき、さらなる量的調査を行い、対処行動、ソーシャルサポート、ハーディネスの関連を示すことなどが今後の課題となった。